

# 富木殿御返事

文永一二年二月七日 五四歳

帷かたびら一領た給おわび候おわひ了おわんぬ。

夫それ仏弟子の中に比丘一人はんべり。飢饉ききんの世に、仏の御時事齋欠かけて候ひければ、比丘袈裟けさをうて其の価あたひを仏に奉る。仏其の由来を問ひ給ひければ、しかじかとありのまゝに申しけり。仏云はく、袈裟はこれ三世の諸げだつ仏解脱報の法衣なり、このあたひをば我ほうじがたしと辞退しましまししかば、此の比丘申す、さてこの袈裟あたひをばいかんがせんと申しければ、仏の云はく、汝ひも悲母いな有りや不いなや。答へて云はく、有り。仏云はく、此の袈裟けさをば汝が母に供養すべし。此の比丘、仏に云はく、仏は此の三界の中第一の特尊なり。一切衆生の眼目にてをはず。設たとひ十方世界を覆おおふ衣なりとも大地にしく袈裟なりとも能く報報じ給ふべし。我が母は無智なる事牛のごとし。羊よりもはかなし。いかでか袈裟の信施報をほうぜんほんきつと云云。仏返詰して云はく、汝が身をば誰が生みしぞや、汝が母これを生む。此の袈裟の恩報ひもじぬべし等云云。此は又、齡よわい九旬じゅんにいたれる悲母の、愛子にこれをまいらせさせ給ひ、而して我と老眼をしばり、身命を尽くせり。我子の身として此の帷かたびらの恩かたしとをばしてつかわせるか。日蓮又ほうじがたし。しかれども又返すべきにあらず。此の帷着をきて日天の御前にして、此の子細を申す上は、定めて釈・梵・諸天しろしめすべし。帷一つなれども十方の諸天此をしり給ふべし。露を大海によせ、土を大地に加ふるがごとし。生々に失せじ、世々にうくちざらむかし。恐々謹言。

二月七日

日蓮花押